

自己中心的な観念体系

東アジアシステムとは、国家関係を価値の優劣により秩序立ててみる自己中心的な観念体系のことである。この体系においては礼にもとづく価値の序列において最も高位に位置するのが中華であり、中華から外縁に向かって同心円状に広がり、中華から遠くに離れた人種、民族、国家ほど価値において低いと観念されていた。「華夷秩序」である。清朝の時代においては、円錐形の頂点に中華が位置し、下方にいくとチベット、モンゴルなどの藩部、さらにその下方に朝鮮、ベトナムなどの周辺国が存在するという構図である。

「東アジアシステム」再現するか

清国は属邦保護のために大量の兵を半島に派した。海峽一つ越えれば九州の日本の安全保障にとつてこれは差し迫った危機であった。日清戦争に日本が勝利して日清講和条約が締結された。第1条は「清国ハ朝鮮國ノ完全無欠ナル独立自主ノ国タルコトヲ確認ス。因テ右独立自主ヲ損害スベキ朝鮮國ヨリ清國ニ対スル貢獻典禮等ハ將來全ク之ヲ廢棄スベシ」であり、ここで清韓宗属関係は断られた。

正論



拓殖大学顧問 渡辺 利夫

中国のシナリオ通りにいくか

この戦争での敗北より中国の国際的地位は急低下し、弱体ぶりを列強に見透かされて国土は次々と蚕食されていった。清朝は孫文の辛亥革命により倒され、新たに共和制の中華民国が建国されたものの、実権は軍閥に握られて混迷を深めた。1949年には中国共産党により中華人民共和国が成立、しかし毛沢東の大躍進政策と文革という2つの狂気に振り回されて極度の低迷をつづけた。

しかし毛の死去とともに、毛の時代に逼塞させられていた鄧小平らが復権し、かつての抑圧的な政策を放棄、「社会主義市場経済」というスローガンをもって民衆の欲望を解放するや、急速な成長が開始された。建国100年の2049年までには米国の経済規模に追いつき追い越すと高唱されている。

手にした共産党の指導者たちは、再び自己中心的な東アジアシステムの構築に向けて動き始めたのであろう。2012年の習近平の党総書記就任以来、「中華民族の偉大な復興」が繰り返されるようになった。「偉大な復興」とは清末期以前の巨大な中華帝国を再現したいという習の願望と野心なのであろう。日清戦争での敗北によって割譲を余儀なくされた台湾の統一がまずなされなければならぬ、と習は考えている。「一帯一路」は陸のシルクロードと海の

シルクロードに沿う国々との関係を深めて、中国の政治的影響圏を拡大したいという衝動の表れであり、歴代王朝の天朝の再現がイメージされているのであろう。

きない住民に多数の死傷者が出た。ゼロコロナ政策への鬱屈が溜まりに溜まっていた民衆の不満が、この事件をきっかけに堰を切ったかのように流れ出した。全国の主要都市においてゼロコロナ政策に対する抗議運動が突如のように噴出、A4サイズのコピー用紙を手にとって頭上に掲げる無数の人々の姿は静かであったものの、その分、不気味に隠然たる圧力を政府と党に与えたのに違いない。12月7日、政府はゼロコロナ政策を全国において一挙に廃止する旨を宣言した。そう宣言せざるを得ない切迫した事情を習は直覚したのであろう。

そのシナリオが習近平の考えているような方向に進むのか否か。成否は一に中国の民衆の動向に関わっている。そのことを、奇妙なのがつい先だつてのゼロコロナ政策の、事前説明のまったくない実にあっけに取られるほどに突然の廃止であった。

民衆反乱によって一つの王朝が崩れ、新たに成立した王朝もまた暴政に耐えかねた民衆の反乱によって崩壊するという反復転変の王朝史を中国は繰り返してきた。あれほど強固に守りつづけてきたゼロコロナ政策を一瞬にして消し去ったという事実は、習1強体制もまた中国史の伝統の中で生きていかざるを得ないことを示しているのであろう。

この夏に思う

(わたなべ としお)